芹霊と
１００人の元カレ
６

芹霊と１００人の元カレ　６

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20324906

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, 最霊(別れています)

芹霊前提、師匠総受けです。最霊（別れています）が含まれます。
倫理がアレです。良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ネタバレ
芹霊は別れません

Table of Contents

芹霊と１００人の元カレ　6

このお話は、１００人の男に捨てられた師匠と、真っ直ぐな芹沢さんが、元カレたちを乗り越えて幸せな未来を掴むお話です。

※

「はーい、全員道着に着替えたか〜？」
ハイ、と超能力者たちがヨシフに返事する。
静岡基地の柔道場。今日は護身術の訓練ということで、芹沢も呼び出されていた。
「今日は受け身だけ覚えて帰ってもらう。というか、柔道で最も大事なのが受け身だ。派手な投げ技ばかりフォーカスされがちだが、実戦で圧倒的に役に立つのは受け身だ」
ヨシフは親指でマットを指差す。
「まずは後ろ受け身から練習してもらう。倒れる瞬間に首を上げて、床を叩く。今日は他に指導員がつくから……なんだ？」
ヨシフの前に、背の高い屈強な念動力使いが進み出る。
「実戦で教えてくれよ、ヨシフ」
殺気立つこの男は、前から『俺の方が強いのに、なんでヨシフが偉そうにしてるんだよ』と芹沢に漏らしていた。
「……いいだろう。かかってこい」
ハラハラしながら芹沢は男とヨシフを交互に見る。
（危なくなったら超能力で止めないと……）
が、それは余計な心配だった。
「クソガキぃいいぃいぃッ！！！！」
両腕を広げて襲いかかる男に、ヨシフは小さくため息をつく。
「ちゃんと受け身取れよ」
す、と男の懐に潜り込んで。
鮮やかにヨシフは一本背負いを決めた。
「……と、まあ、訓練を受けてるやつと受けてないやつとではあか

らさまに差が……ん？」
叩きつけられないようにヨシフが襟を浮かせたにも関わらず、念動力使いの男は白目を向いて気絶していた。
「おーい、しっかりしろ〜。……駄目だな、ちょっと端のマットに寝かせておくわ」
こそ、と顔見知りの指導員として来ていた自衛官が芹沢に耳打ちしてくる。
「ヨシフさん、柔道三段、空手黒帯、剣道五段だから滅多な事しない方がいいよ……自衛官では珍しくないんだけどさ……」
「おい、何情報漏洩してんだ？」
「失礼しましたッ！」
ぴし、と自衛官が気をつけをする。
「ったく……丁度いい、俺に投げられたいやつはかかってこい。複数人でもいいぞ」
ヨシフがそう言っても、それなりに腕に自信のあるはずの超能力者ですらもじもじとナナメを見ていた。
「あ、じゃあ俺、いいですか」
ひょい、と芹沢が手を上げる。
「お、えらいえらい」
「それだけ強い人に投げてもらえるなんて、なかなか無いと思うんで……」
「おいおい、負ける気でくるなよ。上手くいきゃ俺から一本取れるぜ？」
うーん、と芹沢は腕組みをして悩む。
「ヨシフさんからまぐれでも一本取れる自分が想像できないです……」
「……まあいい。かかってこいよ」
「はいっ！」
「……」
「……」
「いや組みついてくれないと投げられないんだが！？」
「あっ、す、すみません」
思わず棒立ちしてしまった芹沢は頭をかく。

「なんかこう、女でも襲うような感じで組みついて来いよ」
「すみません、女の人をどうやって襲ったらいいのか分からないです……」
「…………銀行強盗でも取り押さえるみたいな感じでどうだ」
「分かりました！や、や〰！！」
ばっと掴みかかって来た芹沢の右手を取り、鮮やかにヨシフは一本背負いを決めた。
「！！っ……！」
芹沢の視界がぐにゃりと曲がり、気がつくと地面に叩きつけられていた。上位の有段者であるヨシフの技のスピードは速い。素人では投げられたことすら分からないのだ。
「はは……すごいや……」
「お前ね、無抵抗で投げられてんじゃないよ。俺のこと信用しすぎだ」
「すみません」
めまいがする視界をどこか心地よく感じながら、芹沢は苦笑した。

※

（はあ、訓練の後の仕事はしんどいな……）
早朝訓練から帰ってきて、芹沢は相談所に直行する。
眠たい目を擦りながら、パソコンを開いて予約を確認する。
「おはようございます」
「おお、いらっしゃい」
顔を出した花沢を見て、霊幻はごそごそと机を漁る。
「はい、ハッピーバレンタイン」
（あっ）
霊幻が取り出した小さなチョコレートの包みに芹沢は焦る。そういえば今日はバレンタインデーだった。
「よう、邪魔するぜ」
「師匠、おはようございます」
「れーげんさん、おはよ〰」
続々とチョコレート目当ての人間が相談所に入ってくる。

「お前らね……分かりやすすぎだろ」
苦笑しながら、霊幻は客用に用意していたチョコレートを渡していく。
元カレたちはそれぞれ包みを開けてチョコレートを味わいはじめた。わざわざ霊幻の顔を見ながら食べるために、学校の前に相談所に寄った者も多いのだ。
「あの、霊幻さん、これ、俺から」
芹沢は焦って鞄から小さなチョコレートの箱を取り出した。ジャン＝ポール・エヴァンだ。
「あの、おめでとうございます……？」
何と言っていいか分からなかった芹沢が差し出した箱を、嬉しそうに霊幻は受け取る。
「……俺、バレンタインに本命チョコ貰うの初めてだわ」
その霊幻の呟きに元カレたちが振り返る。顔に、その手があったか、と苦々しい色を浮かべた。
「芹沢、ありがとな」
「っ霊幻さん、これ食べません！？」
苦肉の策で花沢が昼食用に買っていたサンドイッチを取り出す。
「え？いや朝メシ食べて来たし……」
「霊幻さん、シュークリームやるわ」
「師匠、たこ焼き買ってきましょうか」
「霊幻、煙草いるか？」
がたん、とわざと音を立てて霊幻は椅子から立ち上がる。
「……俺、元カレからプレゼント、受け取らないことにしてるから」
「「「「「……」」」」」
（ああ、そうか）
また椅子に座ってガサガサとチョコレートの包みを開ける霊幻を、ぼんやりと芹沢は眺める。
（プレゼントを受け取って貰えるのって、当たり前じゃないんだ）
突然、自分が引きこもりだった時に、母親が買って来た服を受け取らなかったことを思い出す。
（ありがとう、って言って貰える今を、大事にしよう）

「うまっ！？このチョコレートめちゃくちゃ美味くないか！？芹沢も味見しろよ、ほら」
あーん、と差し出してくるチョコレートを咥えながら、芹沢は微笑む。
「おいひいです」
「な！？」
その２人の姿を、影山茂夫の黒い瞳が、じいっと見つめていた。

※

「ごめんな、俺のそんなに良いチョコじゃないんだけど」
仕事が終わって、芹沢のアパートで集合する。
「めっっっちゃくちゃ嬉しいんで気にしないでください」
スーツをハンガーにかけながら芹沢が返す。
「せめて、ほら」
ん、と箱から出したチョコレートを、口に咥えて霊幻が差し出す。
たまらず芹沢はその唇にむしゃぶりついた。
「ん……ん、んんッ……」
口の中から甘いチョコレートを舐め取りながら、芹沢は霊幻をベッドに追い詰める。
「……いいですか」
「ん……後ろ、準備してあるから……」
もう一度口付けながら、芹沢はゆっくりと霊幻を押し倒した。
（ずいぶん触らせてくれるようになったな）
「あっ、芹沢ぁっ……あ、あ！」
ちゅこちゅこと陰茎を擦られて、ぎくりと霊幻は身体を強張らせる。
（霊幻さんがいつまでこの関係を許してくれるのかは分からないけれど）
「霊幻さん、霊幻さんッ……！」
首筋に吸いつかれて、嗚呼と霊幻はたまらない声を漏らした。
（この人をただ傷付けようとした元カレ連合を、このままにするわけにはいかない）

「挿れます」
ん、と囁くように返事をした霊幻の足を持ち上げ、コンドームをつけた怒張を押し当てる。
「は、ぅ……ッ」
挿入の衝撃にシーツを握りしめた手を、そっと芹沢は背中に回させる。
（こうやって繋がれるのも、裸を見せて貰えるのも、霊幻さんがビッチだから当然、なんてことはないんだ）
「ァあ……ッ！」
ずぐ、と奥を犯されてナカイキした霊幻が、ぎゅうと芹沢にしがみつく。
はぁ、と熱っぽい息を吐いて、芹沢も精を吐き出した。

※

「この依頼なんだがな、どうにも妙なんだ」
バスに揺られながら、霊幻が芹沢にコピーした資料を手渡す。
「５人行方不明……！？オオゴトじゃないですか！」
「そうなんだよ……警察も動いてる」
芹沢は慌てて資料に目を通す。
『味玉山のもしもしさん』とタイトルが打たれた資料には、こう書かれていた。
とある男がいつも通り山に入ると、『もし』と誰かに話しかけられた。思わず『はい』と返事をしたら、『お前は人間か？』と問いかけられる。『はい』と返事をしたら、声はそれきり聞こえなくなった。そんな現象が半年前から起こるようになっていたが、実害が無いので放置していた。だが、最近、この山で行方不明になっている人間がいることが、とある女学生の証言で明らかになった。女学生は３人ほどの男性にかどわかされ、山に連れ込まれた。その時にもしもしさんの声を全員聞いたのだ、という。『当然人間だ』、と答えた男性たちに突然もしもしさんは『嘘つきめ！この人でなしどもが！』と怒鳴りつけ、それきり男性たちは消えてしまった。女学生が呆然としていると、『お前は人間か？』と優しい声が落ちてきた

ので、震える声で『はい』と答えた。すると『そうか。ならば服を着て、山を降りなさい。あの切り株の方へ真っ直ぐ行くと、川に突き当たる。川に沿って降りるんだ』ともしもしさんが言ってきたので、女学生が礼を言ってその通りにすると、町について助かったのだと言う。その話を聞いた警察は半信半疑で女学生がバンに連れ込まれたという現場近くを探してみたら、はたして大学生が３人行方不明になっていて、車だけが味玉山で見つかった。騒然となった味玉県警が調べてみると、大学生の他にも指名手配犯の男性が１人と、結婚詐欺を働いていた女性が、味玉山で消息を絶っていた。
「……これは……」
「俺も引き受けたく無かったんだがな、ちょっとお上から直々にねじ込まれてな……」
「かなり危険な気がします。噂が立ち始めてからたった半年なのに、神隠しまで起こしてる。都市伝説としては異常な能力だ」
「だよなぁ。しかも的確に相手を選んでるだろ？これまでの経験からかなりヤバい相手だと思うんだよなぁ……」
「影山くんも花沢くんも都合が付かなかったのは痛いですね」
「エクボは店番してるしな……仕方ねぇよ。急な話だったからな。ま、今日は山に入らずに下見だけにしとこうぜ」
「はい」
丁度目的のバス停について、２人は降りる。
「あんたらもしもし様をやっつけにきただか」
突然農作業姿の老爺に話しかけられて芹沢は飛び上がった。
「もしもし様ぁなんもわるいことしてね。もしもし様ぁ山の守り神だ。助けられたやつもいっぺえだ。もしもし様に手ェ出したら、あんたら祟りに遭うぞ」
「いやーははは……」
霊幻はひたすら愛想笑いを浮かべてじりじりと逃げていく。
「……ッ失礼します！」
だっと駆け出した霊幻に慌てて芹沢もついていく。
「祟りに遭うど〜〜〜〜！」
老爺の怒鳴り声から、２人は必死に逃げた。

「はぁ、はぁ……っ、しまった！山の中に……！」
「急いで出ましょう！」
『来ると思っていたよ、新隆』
（念話！？）
警戒する芹沢の目の前で、かく、と霊幻の膝が折れた。
「霊幻さっ……う……！」
駆け寄ろうとした芹沢の膝も、強烈な眠気によってくずおれる。
『さて、君にも訊ねようか。……君は人間かね？』
「と、うぜん、だッ……」
あっあっあっあっ、と禍々しい笑い声が森に満ちる。

『嘘つきめ！』

ばつん、と芹沢の意識は途絶えた。

は、と芹沢は森の中で目覚める。
「れ、霊幻さんッ！？」
霊幻の姿が見当たらない。
慌てて探しだそうとした芹沢は、ドンと誰かにぶつかった。
「うわっ！？」
「──芹沢」
「社長！？この辺りで任務だったんですか！？」
陸上自衛隊の戦闘服を着た鈴木統一郎は、じっと芹沢を冷たく見つめる。
「芹沢、お前にはがっかりした。足手まといだ。もう現場には来るな」
「え……」
戸惑う芹沢の背中を、そっと誰かが支える。
「あっ、ヨシフさん！社長の様子がおかしくて……！」
「なぁ芹沢、お前もう来なくていいわ。……役立たずはいらねぇんだよなぁ」
「そ、んな……」
芹沢は混乱する。

「俺、何かしましたか？悪いところがあれば直しますし、真面目に訓練受けますからッ……！」
「芹沢」
死角からかけられた声に芹沢はぎくりとする。
「れい、げんさん……」
「鈴木さんから聞いたよ。お前がそんな酷いことをしていたなんて、知らなかった」
冷ややかに霊幻はため息をつく。
「別れよう、芹沢」
「あ……あ……」
芹沢は顔を引っ掻きながら後ずさる。
「あは、あは……アハハハハハ！」
『……ん？こんなに簡単に壊れてしまったのかね？』
ふわふわと真っ黒なカラスアゲハが、うずくまって笑い続ける芹沢に近寄る。
『ふむ……なかなか使い勝手の良さそうな肉体だ。どれ、精神を破壊して、取り憑きやすく……ん！？』
「──捕まえた」
カラスアゲハはジタバタと芹沢の手の中で暴れる。
『精神にかなりのダメージを与えた筈だが！？クソっ、見誤ったか……！』
「これぐらいの絶望じゃ、ちょっと発狂してあげられないですね。……あなた俺の記憶を見れるんでしょう？見ればいい。足元が崩れ落ちるような絶望を」
『う……！？』
カラスアゲハの中に霊幻を薬漬けにされた芹沢の絶望が流れ込む。
『あの馬鹿ども──！！』
ばん、と精神世界が割れて芹沢は目覚めた。
「霊幻さん！」
気を失っている霊幻が、濃緑色のスーツを着た男性に抱き支えられている。
「元カレ連合の馬鹿のことを教えてくれてありがとう。私からもあの連中にはそれ相応の目に遭わせておこう」

「……まさか、あなたも……？」
「いかにも、新隆くんの元カレだ」
（わー……、都市伝説まで元カレだぁ……）
芹沢は思わずこめかみを押さえた。
「ちょっくらヨリを戻したくてな、この山で世直しをして新隆くんを呼んでいたのだよ」
「あなた怪異にされてましたよ！？」
「む……通りで最近、謎の霊力が流れ込んで来ると思った……」
よいしょ、ともしもしさんは霊幻を抱き上げる。
「まあそういうわけだから、あとは若い２人に任せて君は帰ってくれたまえ」
「あんたらそんなに若くないですよね！？」
「素朴に酷いな」
「じゃなくて！そうはいきません、霊幻さんを返してください！」
「──返さない、と言ったら？」
げらげらげら、と周囲の木が笑い始めて、芹沢はひりつくような危機感を覚えた。
（この人、強い……ッ！）
影山茂夫と同等か、あるいは。
芹沢の脳内で、何とか霊幻を救出して逃げ出す方法を考え出そうと焦る心が回る。
「無駄だよ。キミも帰さない。霊力の高い身体があると何かと便利なのでね」
黒い草が生い茂って芹沢の退路を塞ぐ。
「……っ！」
一か八か、全力を叩き込んで霊幻を救出しようとした時。
「……啓示さん？」
もしもしさんの腕の中にいた霊幻がやにわに目を開いた。
「新隆くん──ぐはぁっ！？」
嬉しそうに霊幻の頬を撫でたもしもしさん──いや、もしもし様が。

思いっきり霊幻にビンタされて吹っ飛んだ。

「物理効くの──！？」
「ふ……新隆には私を殴る権利がある。キミの気が済むのなら、何度でも甘んじてその拳を受けよう」
驚く芹沢の前で、もしもし様が頬を押さえてよろよろと立ち上がる。
「何言ってんだ馬鹿！人に勝手に催眠かけるなってあれだけ言ってただろ！？」
「……すまん」
「行方不明者、あれ啓示さんの仕業か？」
「ふ……そうだ」
「だぁからリンチ（私刑）すんなって言ってるだろうが！人を裁くのは！法！啓示さんがちまちま悪人を捕まえても世直しにはならねぇーのよ、分かる！？」
「……それについては議論するのはやめないか？いつも平行線になるじゃないか」
「また俺とは話さないんだな」
「……そういうわけでは……」
「ま、今はいいわ。で？何か用？」
すう、ともしもし様は霊幻の前に飛んで来て、優しく頬を撫でる。
「新隆、こちらへおいで。身体を仮死状態にして、私と同じものになろう。これからはずっと一緒だ」
霊幻は顔を歪める。
「──付き合ってる時に、そう言ってくれてたらなぁ……」
一度、強くまばたきをして。
「忘れたのか？啓示さん。あんたは自分の正義のために、俺を捨てたんだ」
「それはッ！」
「俺を、捨てたんだよ……」
つう、と流れる涙に、もしもし様は押し黙る。
「……すまなかった」
「いいよ、謝んなくて。謝られても許す気ないから」
「……っ」
「行方不明者出しとけよ？そのままにしたら今度はモブ連れて来る

からな？」
「分かった」
ざわざわと植物が分かれて道を作り出す。
「じゃあな、啓示さん」
「……」
もしもし様はずっと、霊幻の後ろ姿を見ていた。

「……すみません、霊幻さん。ちょっと小便に」
「はぁ！？……早くな」
霊幻から離れて、小さな声で芹沢は呼びかける。
「何かご用ですか」
「いやすまないね。キミが今の新隆くんのカレシなんだろう？」
「そうですけど」
こっそりと話かけてきたもしもし様にひそひそと芹沢は返す。
「……私は、愚かだった」
「……」
「世直しのために悪霊になったのに、新隆くんにコスプレさせることしか考えられなくなってしまったんだ……！」
「ホントに愚かだな！？」
「だからと言って、新隆くんを突き放したのは、本当に愚かだった」
「……」
「これをキミに託そう」
す、と空中から白く半透明な手が出てくる。
「何ですか？」
「私の遺骨だ」
「ヒッ！？」
思わず芹沢は叩き落としてしまう。
「おい、丁重に扱ってくれ」
「す、すみません」
慌てて芹沢は白い塊を拾うが、やはりゾっとしない。
「それは私の喉仏の骨だ。最も霊力が込めやすい。私は来るべき日のために、その骨に霊力を貯めていた。──元カレ四天王と闘うため

に」
「あっその設定生きてたんですね」
「うん？」
「あっすみません続けてください」
「……私も含めて元カレ四天王は癖者揃いだ。特に残りの２人は……強いぞ」
この人、四天王だったのか……と思いながら、ごくりと芹沢は喉を鳴らした。
「それは一度だけキミに強大な霊力を与えるだろう。持っていきなさい。……きっと新隆くんを守るために、必要になる」
「ありがとう……ございます」
「私は陰ながら、見守っているよ」
「もしもし様……！」
「……最上。最上啓示だ」
「もがみけいじさん……！」
「……えっ知らない？テレビとか見てない？」
「あっすみません、俺テレビ見ないんです」
「………………」
すぅ、と最上は消えていった。

※

「新隆くん、この料金体系はどうかと思うと前から言ってるだろう」
「陰から！見守るって！言ってませんでした！？！？」
うん、と最上はアゴに指を当てる。
「草葉の陰から……？」
「とんちクイズやってるんじゃないんですよねぇ！？！？」
はぁ、とため息をついて芹沢は相談所を見回す。
（元カレ四天王は残り２人、全員倒せば元カレ連合を何とかすることもできるかもしれない）
芹沢はブラインドの隙間から窓の外を見て、相談所にカメラを向けている男の手からカメラを取り落とさせる。

「……芹沢」
「あっはい！？」
「ホワイトデーにこれが欲しいとか、こうして欲しいとかある？」
「ふぇっ！？」
あわあわと芹沢は脊髄反射で答える。
「一緒に暮らして欲しいです！」
「……いいよ」

優しく霊幻は微笑んだ。

続